

# 大正四年上演の歌舞伎「安井道頓」の番付、及び舞台写真について

船越 幹央

## はじめに — 道頓・道卜への贈位と建碑 —

平成二十七年（二〇一五）は、道頓堀開削四百年の節目に当たる。百年前の大正四年（一九一五）、道頓堀開削三百年の年、大阪・浪花座で「安井道頓」という歌舞伎が上演された。<sup>(1)</sup> 本稿では、その番付を紹介するが、上演までの経緯をうかがうため、大正三年（一九一四）に遡って述べていきたい。

大正三年十一月、陸軍特別大演習に際し、大正天皇の大阪行幸があった。それに併せて、功臣ら十一名への贈位が行われた。そのなかに、道頓堀開削者として「安井市右衛門」(道頓)<sup>(2)</sup>と「安井九兵衛」(道卜)が含まれており、従五位が追贈された。翌四年五月八日、道頓堀北岸の法案寺において、豊臣秀頼、道頓の三百年忌法要が執り行われた。<sup>(3)</sup> その後、大久保利武大阪府知事の発案により、道頓堀付近の有志ら<sup>(4)</sup>が協議して道頓・道卜の紀功碑建設が決まった。用地は道頓堀に架かる日本橋の北詰東側で、かつて安井九兵衛の邸があったとされる場所であった。<sup>(5)</sup>

建碑の地鎮祭は、九月十九日の午前十時より同地で行われた。祭司は高

津神社の宮司で、参列者は道頓の末裔とされる安田孫三郎（黙思）のほか、建碑に当って寄付を行った地元各町関係者など、千名を超えたともいわれる。<sup>(6)</sup> なかでも注目すべきは、松竹の社長・白井松次郎と歌舞伎俳優の實川延二郎（のち二代延若）、市川右団治（二代目）、中村嘉七（五代目）、嵐吉三郎（六代目）や、女優の和歌浦糸子、常盤操子らが参列したことであった。<sup>(7)</sup> 實川延二郎は、翌月の浪花座で二代延若の襲名を控えていた。また、和歌浦糸子や常盤操子は、大正元年（一九一三）に設立された松竹女優養成所の一期生で、女優ブームの一翼を担う人たちである。<sup>(8)</sup> 建碑と演劇界、とりわけ松竹とのつながりが垣間見える。地鎮祭のあと、工事が開始された。

この年は、十一月に京都で大正天皇の即位礼が挙行されることになっていた。建碑も、それに間に合うように竣工したい意向であった。正確な竣工日は判然としないが、『贈従五位道頓道卜翁略伝』（昭和十一年刊）には、「大正四年十一月上旬盛大なる除幕式を挙行」したとある。<sup>(9)</sup> 碑の題字は大久保知事、撰文・西村時彦（天囚）、書・磯野惟秋（秋造）は共に大阪朝日新聞の記者であった。また、製作には天満の石匠・平清が当たった。<sup>(10)</sup>

## 一 歌舞伎「安井道頓」の上演

紀功碑の完成に先立つ大正四年十月三日、道頓堀の浪花座では歌舞伎「安井道頓」が幕を開けた。この興行は、当初、十月一日初日の予定であったが、「衣裳道具新調の都合上」<sup>(11)</sup>、十月三日からに延期された。「安井道頓」は、「是は昨年、陛下大阪に行幸の折、御贈位あり、目下日本橋畔に、頌徳の碑を建設中、不日除幕式を行う事になつて居る、安井道頓、道下の事蹟を新しく脚色したものでございまして」<sup>(12)</sup>というように、「道頓の建碑から思ひ附いた際物」<sup>(13)</sup>であった。三人の合作となり、序幕を中原指月、二幕目を食満南北、大詰を大森痴雪が手掛けた。<sup>(14)</sup>

この十月興行は、實川延二郎の二代延若襲名披露興行であった。襲名披露狂言は「鐘もろとも恨鮫鞘」で、それに加え「安井道頓」「梶原平三試名劔」が上演されたのである。そのため、興行は好劇家の注目を集め、「其披露劇と云ふのを道頓堀に見に行くと偉い景気のものである、単に大阪ばかりぢやない、京都辺りから態々出掛けて行く人が多いには河内屋の勢力も又大と云はなければならぬ」<sup>(15)</sup>というほどで、「連日大入続き」<sup>(16)</sup>であった。

観劇料は、特等・二円六十銭（茶火番附敷物料・二十銭）、一等・二円四十銭（同）、二等・一円十銭（敷物下足料・五銭）、三等・八十銭（同）、四等・五十銭（同）、五等・二十五銭（同）、三階・三十五銭（同）であった（番付による）。

好評のため、十月二十八日まで日延べするという話も出た<sup>(17)</sup>が、浪花座の後興行の關係で十月二十六日までとなった。<sup>(18)</sup>

ところで、「安井道頓」の内容を紹介する前に、その外題について蛇足

ながら触れておきたい。現在の理解では、道頓堀の開削者の一人である道頓は成安道頓であったことが確実視されている。しかし、道頓の姓は長らく安井と考えられてきており、この芝居が上演された大正時代にも、安井道頓とすることが通例であった。

## 二 配役、及びあらずじ

番付によると、主な配役は以下の通りである。<sup>(19)</sup>

・安井道頓	市川八百蔵（七代目、のち七代目市川中車）
・安井道下	實川延若（二代目）
・豊臣秀頼	中村福助（高砂屋、四代目、のち三代目中村梅玉）
・淀君	嵐吉三郎（六代目）
・千姫	市川福之助（二代目、のち四代目市川新升）
・大野治氏	市川右団治（二代目）
・呉竹の局	中村魁車（初代）
・道頓一子悦之助	中村扇雀（初代、のち二代目中村鷹治郎）
・速水甲斐守	中村梅玉（二代目）
・家臣隆慶	中村嘉七（五代目）
・加賀爪甚十郎	市川箱登羅（初代）
・豊島刑部	中村林左衛門（初代）
・津川左近	中村飛鶴（二代目）
・郡主馬	嵐璃珪（四代目）
・坂崎出羽守	中村林若

・奥女中夕栄 中村成笑(初代)

・人夫九郎右衛門 中村扇昇

・曾根正路 中村鷹治郎(初代)

主役の道頓と道卜は、襲名披露の延若(道卜)と、東京から馳せ参じた八百蔵(道頓)である。淀君と秀頼の母子を吉三郎と福助(高砂屋)が演じた。大野治氏と呉竹の夫妻には、右団治と魁車を配し、端役に鷹治郎や梅玉を登場させるなど、豪華な顔ぶれとなった。

同じく番付によれば、「安井道頓」は、序幕「道頓堀堀川普請番所の場」、二幕目「大阪城中奥殿」「大阪城中千畳敷」、大詰「大阪城濠外の場」の三幕からなっており、あらすじは次の通りである。

〔道頓堀堀川普請番所の場〕 道頓堀川の普請中、人夫である九郎右衛門、宗右衛門、久左衛門らは、大阪落城が迫るなか、竹槍を持って大阪城に入城しようとしていた。道頓の家臣・隆慶はそれを止め、普請に従事するよう促す。そこへ道頓が現れ、落城も間近なので入城する、船を回せと命じた。そして、息子の悦之助を呼び、これから入城する旨を告げたのち、実は悦之助の父は大野治長の弟・治氏であり、母は自分の娘で、千姫に従って城内にいる、と告げた。

治氏と妻・呉竹が登場し、千姫を関東方に返して和議を整えたいと道頓に迫る。しかし道頓はそのような口車には乗らないと言い捨てて立ち去った。治氏と呉竹は、こうなっては自刃するだけと覚悟するが、悦之助に止められる。

道頓の弟・道卜が馳せ来って、千姫を自分の手で救い出して関東方に渡

し、その代わりに淀君と秀頼の助命を嘆願することを誓う。

〔大阪城中奥殿〕 鉄砲の音で幕が開くと、関東方の奥女中・夕栄らは千姫を奪おうとするが、道卜が来てこれを斬り、呉竹の手で千姫を奪い取る。それを淀君が追って来て止めようとする。

〔大阪城中千畳敷〕 関東方の上使・加賀爪甚十郎と豊島刑部が来て、速水甲斐守に対し、関東方に降伏せよとの口上を述べる。上使が去って、秀頼が現れ、これを受け入れるのは恥辱であると覚悟を決める。

呉竹は千姫を連れて城中から逃れようとするが、淀君がそれを追って来る。道頓は、娘・呉竹を叱責して、千姫を関東方に渡さない約束をさせる。道頓は和議の使者として自ら関東に下ろうとするが、思い煩った秀頼は淀君を刺そうとし、道頓に制止される。

〔大阪城濠外の場〕 治氏が城へ合図すると、道頓が城中より出て来る。治氏は千姫を関東方へ渡すように言うが、道頓は従わずに立ち去る。そこへ呉竹が千姫を連れて城中より出て来て、千姫を関東方の坂崎出羽守に渡す。道卜が一人で見るところへ道頓が現れ、千姫が関東方に渡ったことを聞いて落胆する。関東方の大砲が楠倉に当たって炎上すると、道頓は事は終わったと悟り、自らは討ち死を覚悟して、道卜に普請中の道頓堀川の開削に邁進せよと言い残す。そこへ曾根正路が来て、淀君と秀頼の最期を告げると、道頓は自刃する。

豊臣家が滅亡した大坂夏の陣を舞台に、千姫の脱出譚を巧みに織り交ぜながら筋を構成する。豊臣家の存続を願いながらも、千姫と交換に秀頼らの助命を考える道卜と、それを是としない道頓。二人を弟と兄として、対比を際立たせた。また、道頓に呉竹という娘がいる設定を取り、彼女が嫁

いだ先が豊臣方の武将・大野治長の弟・治氏であるとして、呉竹を千姫脱出の場面にたびたび登場させる。

まず冒頭に、道頓堀開削の人夫として九郎右衛門、宗右衛門、久左衛門といった人物を登場させている。これは、道頓堀に沿った川八丁の町名が、久宝寺の百姓で道頓堀開削に従事した者の名に由来する<sup>(20)</sup>という考えによる。現在では、ほぼ否定的な説であるが、当時認識されていた町名の由来譚としては、あながち付会の説ともいえない。

また、道頓と道下が兄弟という設定になっている。今日では、二人は縁戚関係にないと考えられるが、かつては道頓と道下は従兄であったという説、あるいは道頓は道下の兄であったという説が行われていた。<sup>(21)</sup>例えば、紀功碑の碑文は「安井道頓及従弟道下」としている。脚本では、秀頼助命について相反する道を選ぶ二人を兄弟とすることで、より対照的に描き出そうとしたようにも思われる。

一方で、道頓の娘・呉竹や大野治長の弟・治氏は、架空の人物であろう。現在の感覚からすると、全編にわたって多くのフィクションが含まれているという印象である。しかし、当時の知見からすると、治氏・呉竹夫妻を虚構の人物として活躍させるほかは、おおむね「史実」に即して脚本を書いたという認識だったと推察される。

### 三 新聞雑誌評

大阪毎日新聞と大阪朝日新聞に「安井道頓」の劇評が出ている。いずれも演劇欄に掲載された。冒頭にあらすじを紹介しているが、その部分は省

略した。<sup>(22)</sup>

〔大阪毎日新聞、大正四年十月九日付〕

■道頓と運命の争 つまり道頓の豊臣家再興の苦心が、事の間違でぐれはまになるのにつけて、運命の向背今更自分一人の手で何うにも出来ないのに驚き、弟を論して権勢争奪の巷から去つて、翻つて人道的事業に貢献させやうと志す点を狙つたものらしいが夫にしては道頓自身と運命の争ひが何処にも強く出してないので作意がほんやりしてゐる。筋は通つてゐるが色が出てゐない憾がある。

■役々の出来栄 八百蔵の道頓は別に技巧に新しい点は無いが持前の名調子で立派に役を持堪へてゐる。延若の道下が兄道頓に対する関係は一寸宗任程の個人色が出てないので演難い所があるらしい。福助の秀頼は上品で生温なところが秀頼の佛を伝えてゐるが、何の為に淀君を殺さうとするのか訳が分らない。魁車の呉竹はよく演てゐた。右団治の大野治氏は安つぽ過ぎる、狸爺ともいはれる家康の使者として最少し鱗があつて欲しい。鷹治郎の曾根正路は無くもがなの役である。那の一人物が出るだけで道頓最後の悲劇がどれ程弱められるか知れない。作者の罪であり、かねてまた興行師と俳優の罪である。

〔大阪朝日新聞、大正四年十月十二日付夕刊〕

■社稷一朝に虚となつて本丸から寄手を望みつ、狂悶する秀頼母子は面白い窺ひ処で結構だが其他の人物の性格が一夜漬のお問に合せである為折角の千畳敷の場面も間が抜けて惜しい材料がやすく殺されてしまつてゐる。

■遺線に頗る苦心の跡の見える脚色とこれ迄あまり聞いた事のない人物とを与へられて延・若・の道下、魁・車・の呉竹、右・団・治・の大野治氏などが夫々の性格を探り／＼に演じてゐる内に八・百・蔵・のみはそんな事には頓着なく持前の柄と調子とでグン／＼演つて行く処道頓正に清正程の価値がある、本領の女形の時には妙に冷かすざるのに反し福助の秀頼は頗るはまつた役で情熱も可なり出た、吉・三・郎・の淀君はやすつばくて物足りない(玖琉盤)

芝居としては、「作意がほんやりしてゐる」とか「人物の性格が一夜漬のお間に合せ」であるなど今ひとつと評され、俳優陣も初役にその性格をつかみあぐねた模様である。そのなかで、道頓役の八百蔵が迫力のある演技を見せた。

雑誌では、「演芸画報」大正四年十一月号に、渡辺霞亭「浪花座見物」が掲載されている。

一番目の「安井道頓」は去年の秋贈位の恩典に浴した安井道頓の事蹟を、最も誇張的に、最も芝居らしく脚色した準実物である、一年越の際物は少々気の抜けた感もあるが近く道頓の建碑式があるといふから、少ばかり香ひが残つて居る、何しろ、大阪を中心として関西第一の歓楽場となつて居る道頓堀を開いた大恩人の事蹟を吹聴するのであるから、気は抜けても、実物がかつても、そこに深い美しい意味があつて、至極結構ではあるが、道頓兄弟をあまり大軍人大忠臣に仕揚げ過た結果、一寸途惑ひの形がある、冥途の兄弟も「わし等はそんなものぢやせんよ」と驚いて居るだらうと想像される、殊に秀頼の簾中千姫を搦ませて、それに兄弟意志の齟齬を見せる彩色にしてあるから道頓兄弟が大阪城を背負て立ちさうなさまであ

る、道頓の為めには有難迷惑かも知れない、道頓兄弟の生命は、そこ以外にもつと確な物がある筈だ

八百蔵の道頓が口で勝り、延若の道下は活気で見られる「福助の秀頼も悪くない、魁車の呉竹の局はよかつた

「」内は引用者が補った。

#### 四 番付について

上演に際して発行された番付は、洋紙に印刷して袋綴じ(ホチキス留め)したもので、縦二十一・五センチ、横十五センチ(現在のA五判相当)、七丁(十四ページ)からなる。

表紙(二ページ)には、

当ル大正四年十月興行／毎日午後一時開幕

壹番目／先頃思召をもつて／位記を賜り／近頃日本橋がりに／頌徳碑を建つる／安井道頓 三幕

中幕／古郷へ綺羅を／星合寺／かざる季候も／紅葉時／梶原平三試名 一幕

式ばん目／嗚呼がましくも／御す、めに／亡父の型の／古手屋を／又新らしく／名跡をつくも／鐘もろとも恨鮫鞘 三幕

道頓堀／浪花座／電話南一四五九番／式七〇九番

という記載があり、紫色で「浪花座印」が二か所捺印されている。

「安井道頓」の角書には、従五位を賜つて日本橋の畔に頌徳碑が建立さ

れる旨が記されている。

二ページには口上と出演俳優名、三・四ページには活字で芝居のあらすじが記載されている。五ページには「慶長十九年五月六日／道頓の入場」、六ページには「慶長十九年五月七日／秀頼の苦悶」、七ページには「慶長十九年五月七日／関東の毒計」と、それぞれ絵看板風の絵があり、いずれも下段に俳優名が記されており、絵本番付になっている。

八・九ページには「梶原平三試名劔」、十ページから十三ページには「鐘もろとも恨鮫鞘」について記載されている。裏表紙（十四ページ）は、頭取や狂言作者の氏名と、観劇料などが記され、鉛筆で「大正四、十」の書き込みがある。

このうち、二ページの口上については、やや読み難くもあるので翻刻しておく。

#### 乍憚口上

天朗かに気澄むの好季当座盆  
替り興行の儀大阪歌舞伎の重  
鎮を集め久方ぶりに大一座を以  
つて開演可仕尤夏季休演中な  
りし中村鴈治郎中村梅玉一座ニ  
東京より久々に市川八百蔵を迎へ  
なほ實川延二郎儀かねて御最員の御  
勧めにより此度二代目實川延若を  
襲名させその御披露をも可仕候すべ  
ての上留意せし当興行に多大の御

同情を賜り賑々敷御来観の程伏て

奉懇願候

月 日 座主

謹白

また、口上の下に記された俳優名等は次の通りである。

中村鴈治郎／中村福助／中村魁車／林 長三郎／中村飛鶴／市川福之助  
／中村成笑／中村扇昇／中村扇雀／市川右団治／實川芦鷹／中村林若／中  
村林左衛門／市川箱登羅／中村嘉七／嵐 璃玉／嵐 吉三郎／實川延二郎  
改メ 實川延若／中村梅玉／当ル盆替り興行／東京下り／市川八百蔵

本稿では、表紙から七ページまでと裏表紙を写真版で掲載する（筆者所蔵）。

#### 五 舞台写真について

この演目については、幸い「演芸画報」大正四年十一月号に舞台写真四枚が掲載されているので、併せて掲出しておきたい（筆者所蔵）。

一枚目は、三つ折りになった大判写真で、「大阪城千疊敷の場」である。俳優は「中村福助の豊臣秀頼」と「市川八百蔵の安井道頓」。

二枚目以下は通常の判型となる。二枚目は、「道頓堀川普請の場」で、「市川右団次の大野壱岐守治氏」と「中村魁車の呉竹の局」。画面上部には、「安井道頓の墓前」として、「市川八百蔵 中村福助 嵐吉三郎 白井

松次郎 鶴屋南北 實川延若 中村扇雀 市川右団次 中村魁車 中原指月」の集合写真を掲げる(後述)。

三枚目も同じ場で、「實川延若の安井道卜」と「中村扇雀の道頓一子悦之助」、さらに画面左上に枠囲みで「嵐吉三郎の淀君」を載せる。

最後に、「大阪城本丸帯廓畔の場」(上述の大阪城濠外の場と同じ)として、「市川八百歳の安井道頓」と「實川延若の安井道卜」である。

ところで、二枚目に掲出された集合写真「安井道頓の墓前」について付言したい。この写真は、番付の三ページの上部にも「安井道頓道卜建碑地目標及俳優の墓参」と題して掲載されている(二枚のうちの一枚)。五輪塔の前で僧侶が読経しており、その左に俳優たちが並んでいる。

僧侶を除き九人が写っているが、キャプションの氏名は十人記されている。顔を見ると、どうやら白井松次郎が加わっていないらしい。確かに、後列右端は八百歳、その左は福助であり、前列右端は延若、その隣は扇雀(若き日の二代鴈治郎)で間違いなく、左から二人目も魁車であろう。つまり、キャプションの人名は、白井社長を除く人物を立ち位置に従って列記したものと考えられる。また、鶴屋南北とあるのは食満南北のことである(六代目鶴屋南北を名乗った)。なお、番付掲載写真では、横顔の中原指月と考えられる人物がカットされている。

五輪塔は、千日前の三津寺墓地松林庵(大阪府中央区千日前二)に現存するもので、同地で撮影されたと考えられる。ただし、撮影日時は不詳である。

## おわりに

歌舞伎「安井道頓」は、知り得る限り、これ以後上演されることはなかった。<sup>(23)</sup> まさに際物として、道頓堀開削三百年にのみ登場したのであった。

奇しくも、本稿執筆中の平成二十七年(二〇一五)十月、吉本新喜劇で「成安道頓」夢を掘った男<sup>(24)</sup>が上演された。吉本新喜劇ならではのギャグを交えた演出であったが、史実を踏まえつつ虚構を織り込んだ構成と見受けられた。

感慨深かったのは、百年前、「安井道頓」として上演された芝居が、今回は「成安道頓」と題されていたことである。百年の間に認識が変化したことは、先学の研究と普及の賜物であり、うれしい思いであった。反面、観覧者の多くがその点に無頓着のように見えたことは、少し寂しい気持ちを抱かせたのである。

## 註

(1) この上演については、『近代歌舞伎年表 大阪篇』五、八木書店、一九九〇年、七六一〜七六二ページに、演目、配役、口上、観劇料などの記載がある。記載の典拠は本稿で紹介する番付等なので、本稿は『近代歌舞伎年表 大阪篇』を補足する資料として活用いただきたい。

(2) 牧英正『道頓堀裁判』岩波書店、一九八一年、十六ページ。位記には、市左衛門ではなく市右衛門となっている。

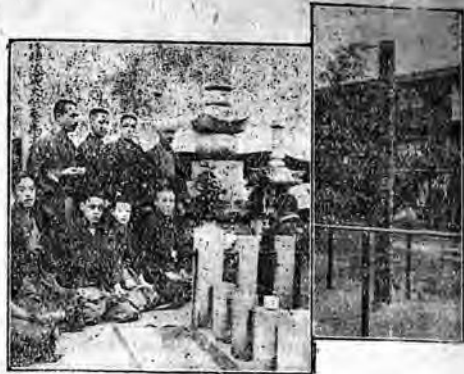
- (3) 『贈従五位道頓道下翁略伝』道頓祭協賛会、一九三六年、五ページ。
- (4) 石碑の台座には、以下の十三町の名が刻まれている。長堀橋筋二丁目、大和町、宗右衛門町、心齋橋筋二丁目、久左衛門町、湊町、九郎右衛門町、西橋町、東橋町、日本橋筋一丁目、高津町十番町、二ツ井戸町、高津町壱番町。高津神社が所在する高津町一番町を除き、すべて道頓堀沿岸の町である。
- (5) 前掲(3)、五ページ。
- (6) 大阪朝日新聞、及び大阪毎日新聞、大正四年九月二十日付。なお、上記二紙については、以下すべて大阪版による。
- (7) 前掲紙。
- (8) 『松竹百年史 本史』松竹、一九九六年、一七六～一七八ページ。
- (9) 前掲『贈従五位道頓道下翁略伝』、七ページ。
- (10) 石碑の台座銘による。
- (11) 大阪毎日新聞、大正四年十月一日付。
- (12) 大阪毎日新聞、大正四年十月四日付。
- (13) 大阪朝日新聞、大正四年十月十二日付夕刊。
- (14) 澤井万七美「初代中村鴈治郎年譜稿」(「歌舞伎 研究と批評」21、一九九八年所収)。
- (15) 京都日出新聞、大正四年十月十二日付夕刊。
- (16) 渡辺霞亭「浪花座見物」(「演芸画報」大正四年十一月号所収)。
- (17) 大阪朝日新聞、大正四年十月二十三日付夕刊。
- (18) 大阪毎日新聞、大正四年十月二十八日付夕刊。
- (19) 俳優については、『歌舞伎俳優名跡便覧 第四次修訂版』日本芸術文化振興会、二〇一二年、『歌舞伎人名事典』日外アソシエーツ、一九八八年などによるが、一部不詳のものがある。
- (20) 宮本又次「大阪三郷の成立と道頓堀と安井家(解説一)」(『大坂菊屋町宗旨 人別帳』六、吉川弘文館、一九七六年所収)。
- (21) 『南区志』大阪市南区役所、一九二八年、五三四～五三七ページ。
- (22) 新聞の引用については、原文には人名等に■点や▲点が付されているが、煩雑になるため、すべて圏点に改めた。
- (23) 『松竹関西演劇誌』松竹編集部、一九四一年、二一三ページ、三四五ページ。
- (24) 平成二十七年十月二日～十月十一日、なんばグランド花月、全十公演、公演時間一時間四十五分。脚本・宮崎高章、演出・吉谷光太郎。出演・すっちー(成安道頓)、清水けんじ(安井道下)、吉田裕(真田幸村)、島田一の介(豊臣秀吉)、鳥川耕一(徳川家康)。大阪の陣三部作の完結編として上演された。



番付 1ページ (表紙)



(安井道頓堀川普請番所の場  
目録及び併録の墓誌)

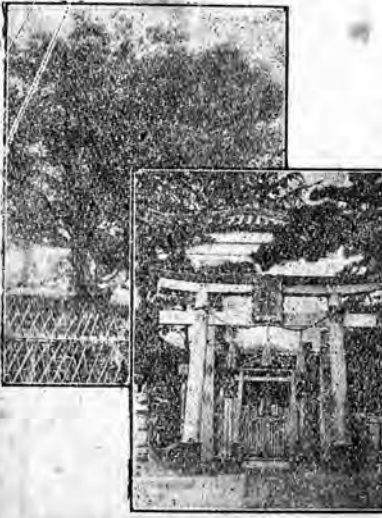


序幕道頓堀堀川普請番所の場

先年 聖上 攝河泉の大演習に行幸の砌、特に思召を以て從五位を贈らせ給ふたる、大阪の恩人安井道頓、しかも其兄弟の碩徳碑が近く、日本橋の北詰に建設さるゝ、浪花の偉人はこんな人であつた、安井道頓は名を市左衛門成安と言ふので、戦國の世に産れて、豊臣秀吉の御家人となつた、偶々秀吉が大阪の舟運の便を圖る爲に入堀川(今の道頓堀川)を開鑿することを道頓に命じた。工事が完全に竣工しない内に、大阪の冬の陣、夏の陣が興つた、徳川家康は機逸す可らずと、種々の難題を大阪に持込み、秀頼を亡ぼさうと圖つた其以前秀吉が最後の日、徳川家康、前田利家等を枕邊へ呼んで、秀頼の後事を托した、家康は其時快諾したのであつた、しかも自分の孫娘たる千姫を秀頼の室として大阪へ送つた家康と秀頼とはかうした血縁も因縁も深かつた、天下の爲には、そんな私の縁を顧みないので、終に秀頼は悲惨な最後を遂げるやうな目に遇つた、此間に道頓は入堀川を掘つたのである、さうして豊臣最後の日には花々しく討死したのであつた。

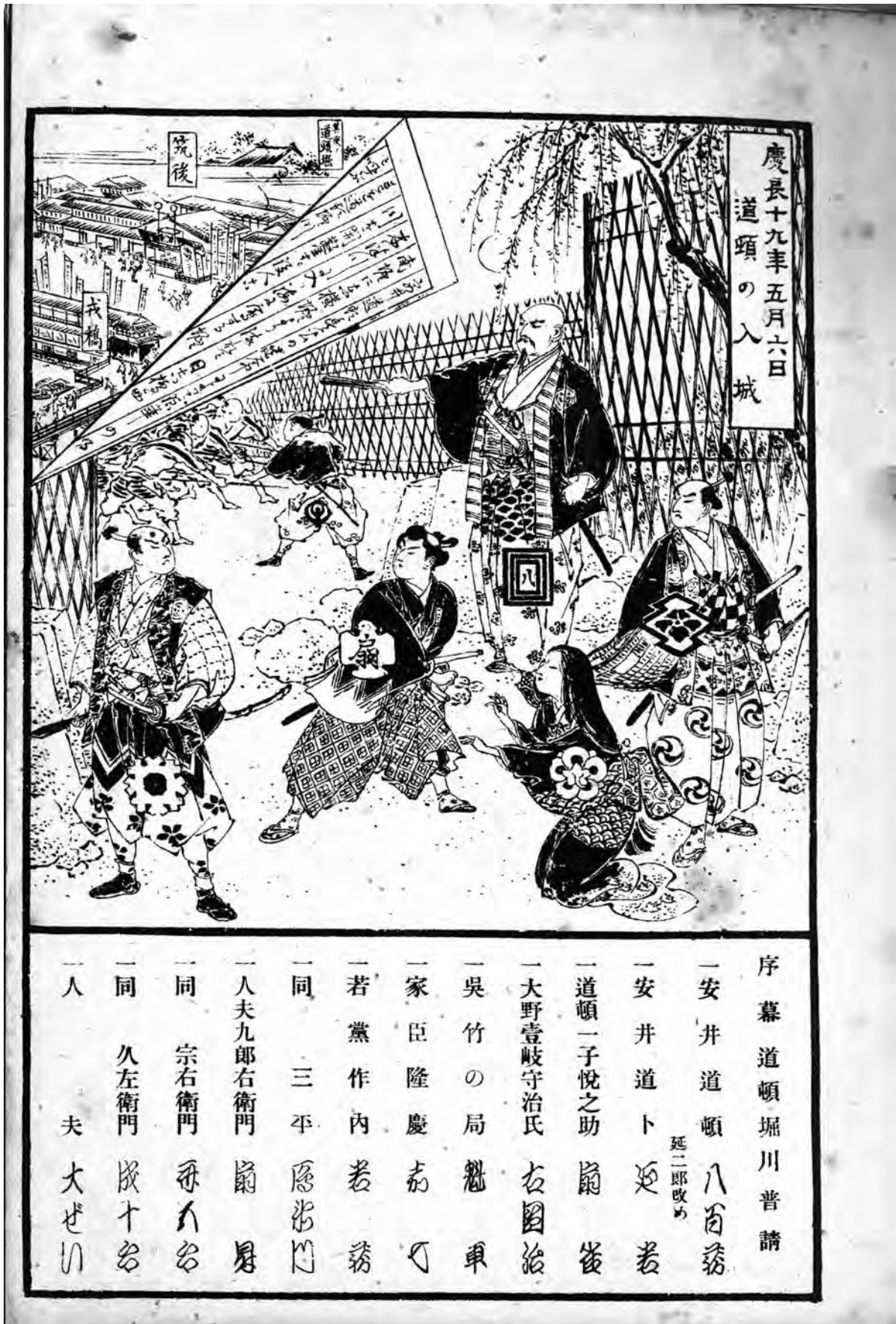
入堀川(今の道頓堀川)工事の体、其人夫、九郎右衛門、宗右衛門、久左衛門(今の道頓堀沿岸の町名は道頓の領地久寶寺村より出で、道頓堀川を掘割したる人夫の名なり)等、安井道頓の恩に感じ、共に大阪城に入城せんと竹槍を持つておし寄するを道頓の家臣隆慶(道頓堀相生橋東を隆慶町といふは此人の名をとりしなり)これを止め、堀川の工事に従事する方が可からんと説得す、道頓出來り、最早大阪落城も間近に迫ればこれより入城せんと堀川へ舟を廻せと命ずる、此處に道頓の孫悦之助(これは偽はつて道頓の子となしたるもの)父上と呼ぶ道頓は悦之助を膝近く呼寄せ入城の由を語り、悦之助に實は現在の孫にして、父は大野治氏とて大野治長の弟なれど徳川の恩顧の爲今は關東にあり、母は我が娘にして千姫に隨ひ大阪城中にあり、やがては父母に名乗り合せんと告げて共に去る、其後に治氏と其妻の吳竹出來り、千姫を關東方へ還して和議を整へんことを父道頓に願はんと語りつゝ來る、道頓入城の姿に出づ、左右より千姫の還送を迫る、道頓は關東の狸爺にかたられて其口車に乗る吾ならずと隆慶と共に去る、夫婦は凭くなる上はと自及せんとする悦之助は父上、母上と呼んでこれを留む、夫婦は尙も死を急がんとするや道頓の弟道ト馳せ來り、千

姫は吾が手にて救ひ出さんと其報恩として淀君秀頼を助命すべき神文を大御所に書かせよと誓の件にて幕  
 二幕目大阪城中奥殿 大阪夏の陣、鐵砲の音にて幕時くと、其處へ關東方の夕榮といふ奥女中は腹心の女中と共に千姫  
 を奪はんと圖るを道下來りて之を切害して後、吳竹の手にて千姫を奪ひとる、淀君追ひ來りてこれを留む、道下諫むれど  
 淀君肯かず、道具一轉す、  
 大阪城中千疊敷 關東の上使なる加賀爪、豊島の両使來るを速水甲斐上使受をなして、秀頼に關東方に降伏せよとの口  
 上を聴く、上使の去りたる後、秀頼出で來り、喪家の犬の餘物に尾を振るは武門の恥辱なりとて速水甲斐と共に覺悟を極  
 はむ、津川左近は戰場より歸り來り、千成瓢の馬章を置いて去る、秀頼述懐あつて速水甲斐と共に去るや、其後に吳竹は千  
 姫の供をして再び城中を逃れんと出で來る、淀君は狂氣の如く追ひ來る、道頓出で、これを見て、娘を叱して、淀君に千姫を  
 關東へは渡さざるの誓をなさしめて兩人を郡主馬に預け、秀頼公には淀君の御心を察して賢慮を廻らし給へ、此道頓は和  
 議の使者として關東へ行かんといふ、秀頼は思ひ煩ひて淀君を刺さんとするに至る、道頓之を止めて兩人暗涙にむせぶ。幕  
 大詰大阪城濠外の場 幕明くと大野治氏出で來りて城中へ合圖する、道頓城中より出で、治氏は千姫を關東方に渡せと  
 謂ふ、道頓肯せずして共に去る、吳竹は千姫に供して城中より出で來り關東方の坂崎出羽に渡して去る、道下一人となり  
 て四邊を見廻はす内に道頓再び出づるによつて、千姫を關東方に渡したればおつ  
 つけ和議もならうと謂ふ、道頓之を聴いて、嘆息して、千姫さへ奪はば關東方は  
 城内へ殺到するは必條なり、斯くなる上は人力を以て最早如何ともする能はずと  
 運命のつれなきをかちつゝある折しも藤堂方の打出す大砲は糶倉に當りて火炎  
 天を焦す、道下驚いて馳けつげんとするや道頓此を止めて、見よ既に事は終れり  
 此上は道頓は打死す可ければ御身は兼て工事中の入堀川開鑿に身をゆだねよと懇  
 に謂ひふくめて道下を落延させて後、大野治氏馳せつけたれば、これに打れんと  
 したれども治氏恐れて近づかず、かゝる處へ會禰正路秀頼淀君の最期を告げ來る  
 依つて道頓自盡す、吳竹出で來り糶倉の火を見て驚く。幕



(安井道頓舊邸に有りし橋)

(高津神社境内へ合祠されたる安井神社)



慶長十九年五月六日  
道頓の入城

序幕 道頓堀川普請  
 一安井道頓 八百五  
 一安井道卜 延二郎改め 老  
 一道頓一子悦之助 嗣 後  
 一大野壹岐守治氏 右圖治  
 一吳竹の局 魁 車  
 一家臣隆慶 老 可  
 一若黨作内老 秀  
 一同 三平 隠形門  
 一人夫九郎右衛門 嗣 男  
 一同 宗右衛門 承八 老  
 一同 久左衛門 辰十 老  
 一人 夫 大ぜい





廣長十九年五月七日  
關東の毒計

大詰 大阪城本丸帯廊の畔

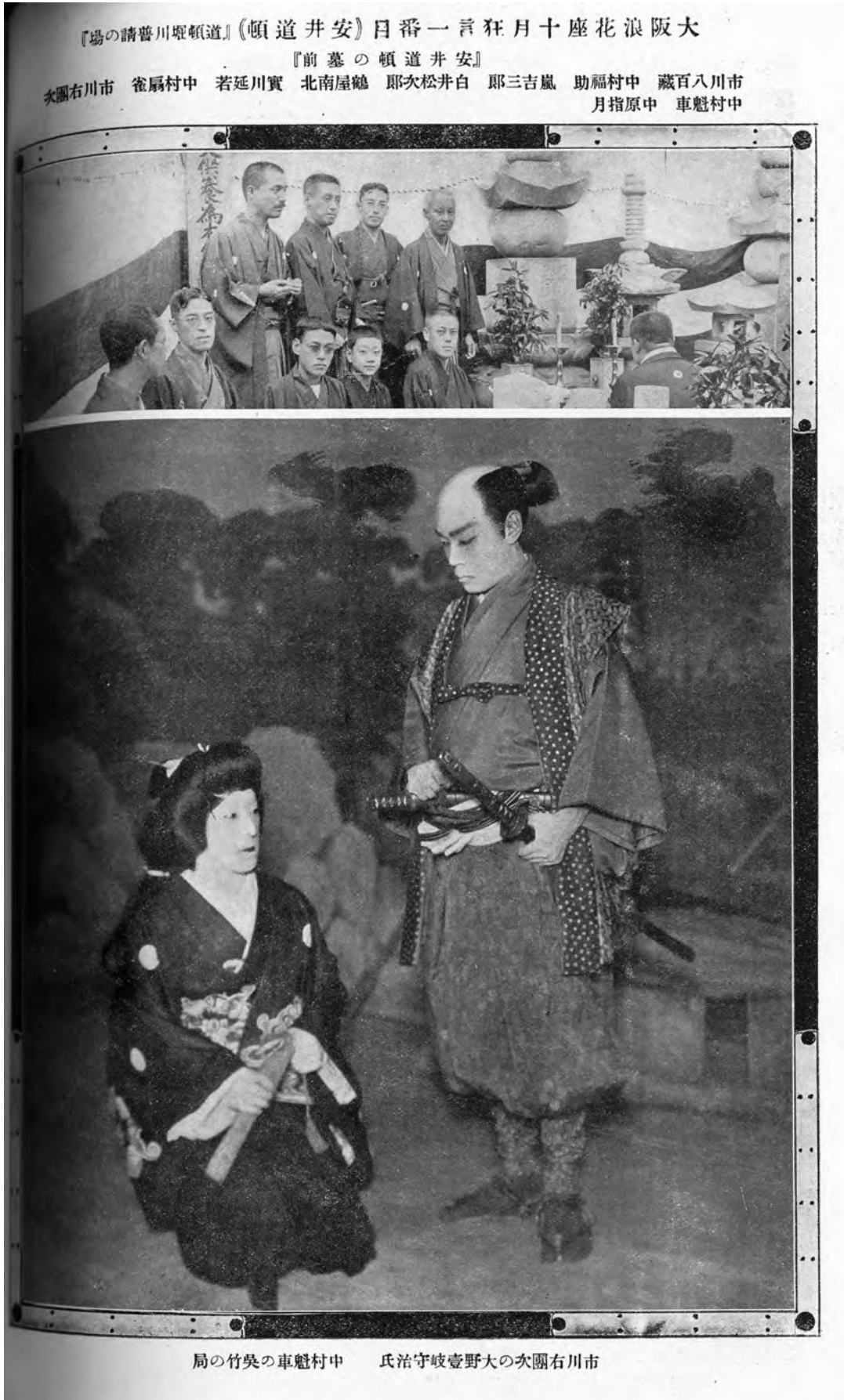
一安井道頓 八百秀  
 一安井道下 延 老  
 一大野治氏 右 國治  
 一坂崎出羽守 林 老  
 一加賀爪甚十郎 箱 登 飛  
 一豊島刑部 林 尤 老  
 一郡主 馬 稻 種  
 一軍卒 枝 枝  
 一同 右 田 秀  
 一同 冠 三 老  
 一同 光 車  
 一同 百 六 老  
 一同 長 平  
 一同 孫 九 老  
 一同 千 福 之 老  
 一吳竹の 局 魁 東  
 一關東方 兵 士 大 せ い  
 一曾彌 正 路 鷹 治 老

<p>正頼取 菊尾比呂</p>	<p>山田安太郎</p>	<p>中村成太郎</p>	<p>勝 高橋 藤 雨</p>	<p>狂者 清木 久 輔 成木 久 輔 成木 久 輔</p>	<p>作者 鶴屋 南 北</p>	<p>太夫 高橋 芳 天 高橋 芳 天</p>	<p>日 日 日 日 日 日</p>
<p>観劇料 特等 金 卅 圓 五 十 銭 一等 金 卅 圓 十 銭 二等 金 卅 圓 五 銭 三等 金 卅 圓 二 銭 四等 金 卅 圓 一 銭 五等 金 卅 圓 五 銭 六等 金 卅 圓 二 銭 七等 金 卅 圓 一 銭 八等 金 卅 圓 五 銭 九等 金 卅 圓 二 銭 十等 金 卅 圓 一 銭</p>				<p>中橋 方 楽 方 可</p>	<p>観劇料</p>	<p>日 日 日 日 日 日</p>	<p>日 日 日 日 日 日</p>

番付 14ページ (裏表紙)



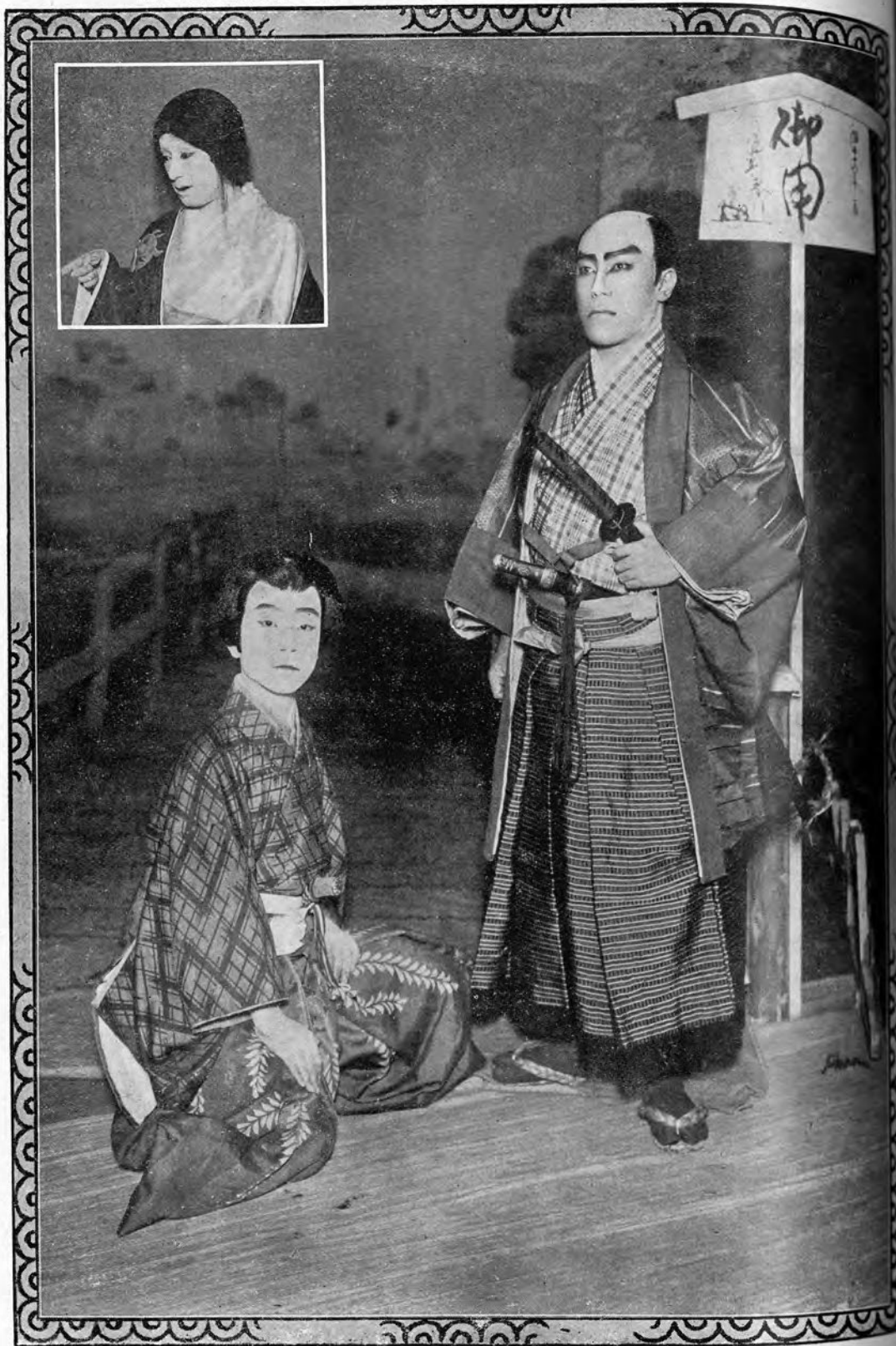
演芸画報(1) 大阪城千疊敷の場(市川八百蔵、中村福助)



演芸画報(2) 道頓堀川普請の場(市川右団次、中村魁車)

大坂浪花座十月狂言一番目 (安井道頓) 道頓堀川普請の場

嵐吉三郎の淀君



實川延若の安井道頓一子悦之助 中村扇雀の道頓堀川普請の場

演芸画報 (3) 道頓堀川普請の場 (實川延若、中村扇雀、嵐吉三郎)

『場』の畔廓帶丸木城阪大』(頓道井安)目番一言狂月十座花浪阪大



演芸画報(4) 大阪城本丸帶廓畔の場(市川八百藏、實川延若)